卒業生インタビュー

東大の未来図、日本の農の未来図を描く

ハウスでトマトを水耕栽培する川名さん。

川名桂

Kawana Kei

都心で農にこだわるのは、直接消費者のもとに届けられるから

文科三類から理科系に進む

高校生時代、将来の展望を模索したまま大学受験を迎えました。進路は大学入学後に決めよう、どの分野に興味が湧くかを探ろうと考えて、前期課程で幅広くいろいろな科目を履修でき、選択肢がたくさん持てる東大を選びました。文系が得意だったので文科三類（以下文三）に入学しましたが、国際機関で働く事にも興味がありました。ある程度早い時点で理系に進もうとは考えていたのですが、JICAや国連でジェネラリストのような調整的な働き方をするより、専門家として現場で力を発揮したいと思うようになりました。

文三から理転[※1]するとなると、農学部では国際開発農学、農業経済、工学部は都市工学、社会基盤、ロボット系に絞られました。農業には縁がなかった私ですが、逆に日本の農業に興味が湧き、農業現場に行く授業を選ぶようになりました。授業、途上国でのボランティア活動、フィールドワークを通して海外を訪問する機会が増えたこと、農学部のテーマに興味を感じたことで環境資源科学専修へ進学することにしました。

大規模農場の楽しさと小規模農業への思い

学部卒で入社したのは、インターンをしていた時期に出会った福井県の大規模農場でした。農学部の研究室では「農家さんに学べ」と言われていたせいもあり、現場の発想に近い理念をもつ会社で、学びながら働ける事が魅力でした。

農産物の商品開発や加工をするつもりで入社したのですが、自社農場を立ち上げる新規部署の栽培担当になりました。初めて農業現場で働くことになり、これが私のターニングポイントといえます。大学の実習と違い、生産をし、かつ経営をする面白さ、正解のない中で農とかかわることに夢中になりました。実験など試行錯誤しながら栽培管理や技術革新に取り組むことは、大変楽しいものでした。

一方、大規模農場で大量の工業製品を作るような仕事をしていると、小規模な農業への思いが強くなりました。学生時代に出会った農家さんのように、自分のやりたい形で農業をやっていきたいという気持ちが芽生え、次第に独立したいと考えるようになったのです。工場を回っているうちに、「もし自分でやったら売り上げはこれくらい」などと、ビジネスプランを組み立てるようにもなり、東京での農業を考え始めました。

のびのび、ストレスを感じさせずに育てているトマト。作り方で大きく味が左右されるのも特徴とか。

都心で農業をしたいという強い思い

3年ほどで退職し、その後2年間は清瀬市の農家さんで研修をしながらいろいろ学びました。2018年に「生産緑地の貸借[※2]」による新たな法が施行されたことが、追い風になりました。これは生産緑地を借りることができるものです。私はその第一号です。ネイバーズファームを設立し、就農当初の2年はハウスもなかったので、研修に加え市民農園の講習などバイトも多く、がむしゃらに働きました。

都市農業にこだわったのは“流通に時間をかけない”“取れたての野菜を消費者に直接届ける”ためで、流通を経ればその分コストに上乗せされるからです。東京で農地探しに奔走し、その後日野市の地主さんと出会い、30年の貸借期間を約束され、今年で5年目に入ります。

ビニールハウスの主力はミニトマト、トマトで水耕栽培を取り入れています。土栽培だと収穫面の苦労があり、住宅地にはトラクターも入れないなどの問題点があります。水耕栽培では、水や温度をITシステムで管理しています。水量はcc単位で、温度も細かな数値で環境管理ができ、その結果がトマトの味にあらわれるから面白いです。

大規模農場で経験していたトマト栽培法は体力的にも無理がありません。クリーンでこだわりを表現するにはうってつけの野菜です。また生産性も高く、価格も安定しているので、うちの主力商品です。

野菜づくりの醍醐味と挑戦

これからは私が学んだ「面白さ」「技術」をスタッフや新しく農業に携わる人にわかりやすく伝えることに挑戦していきます。例えば子どもたちと一緒に野菜の種を撒いて収穫、値付けをするプロセスを経験してみるとか。

東京で農業をすることに求められるのは、鮮度のよい野菜を消費者に届けるのはもちろんですが、農業体験の場としても価値があるように思います。農業が持つ力、ポテンシャルを発信し、都市に住む人と農業を近づけるのがテーマです。ボランティアでお手伝いに来てくださる方も、健康的で外で動くのは楽しいとおっしゃってくれますし、畑には人を元気にするパワーがあります。

Profile

2014年農学部環境資源科学専修卒。ネイバーズファームオーナー。発展途上国でのボランティアで農業・食と出会ったことがきっかけで農業に進む。19年に念願の都市部で農業をスタートさせ、現在ではトマトを中心に年間約30品種の野菜を生産している。

※1 文系から理系に進路を変えること。※2 生産緑地の貸借により、都市農地の有効活用を目的とした法律。